研究報告
医療看護研究28　P.86－95（2021）

小児看護学実習における指導マニュアルを活用したペア実習指導の実際

Actual Conditions of Paired Training Guidance Using an Instruction Manual in the Practice of Child Health Nursing

古　屋　千　晶[1)]　FURUYA Chiaki
西　田　みゆき[2)]　NISHIDA Miyuki
齊　藤　麻　子[2)]　SAITO Asako
林　　亮[2)]　HAYASHI Ryo
込　山　洋　美[3)]　KOMIYAMA Hiromi

要　旨

本研究の目的は、小児看護学実習の指導マニュアルを活用したペア実習指導の実際を明らかにすることである。指導者を対象にインタビュー調査を行い、質的帰納的に分析した。その結果、指導マニュアルを活用したペア実習指導の実際について【ペア実習指導に関して共通理解し指導ができた】【統一したペア実習の指導ができた】【ペア実習指導の振り返りができた】【ペア間の関係性に悩んだ】の４つにカテゴリー生成された。

これまで、ペア実習指導について具体的に学生のペア実習に関する概要や指導の際に留意することなど明文化されていなかった。そこで、ペア実習指導マニュアルを用いて実習指導を行った結果、対象者は指導内容が明文化されたことで、共通理解および統一した指導ができたと、ペア実習指導の実際について語っていた。一方で、ペア学生間の関係性について悩んでいた。

統一した指導を行うためにペア実習指導の際には指導者間の相互協力が必須であり、指導マニュアルを有効に活用することが必要であると示唆された。

キーワード：小児看護学実習、ペア実習、指導マニュアル、実習指導者
Key words：child health nursing, pair practice, guidance manual, clinical instructor

Ⅰ．緒言

少子化の影響により、小児医療現場では病棟の閉鎖や入院施設の縮小が進んでいる。また、医療制度改革に伴う地域包括ケアへのパラダイムシフトから、子どもの入院期間も短縮化され、看護基礎教育における小児看護学実習での担当患児の選定に苦慮している現状がある。2017年度日本看護系大学の臨地実習の実態調査における小児看護領域に関する報告では、臨地実習における課題や問題の内容として、実習施設の不足/確保困難と回答している割合は６割以上であった（日本看護系大学協議会，2018）。また、普段の生活で看護学生が子どもと接する機会が少ないために子どもの現実的な姿を知るだけで精一杯であり、看護実践に到達できないと報告されている（西田 他，2003）。このような状況のなか、小児看護学実習では様々な工夫がされている。

所属するＡ看護系大学の小児看護学実習では、患児１名に対して２名の学生が担当する方法（以下、ペ

1）順天堂大学医療看護学部
Faculty of Health Care and Nursing, Juntendo University
2）順天堂大学保健看護学部
Faculty of Health Science and Nursing, Juntendo University
3）日本赤十字看護大学大学院看護学研究科博士後期課程
Graduate School of Nursing Doctoral Program in Nursing, Japanese Red Cross College of Nursing
（May. 6. 2021　原稿受付）（Jul. 21. 2021　原稿受領）

ア実習）を実施するようになってから10年余りが経過した。ペア実習において臨地実習指導者と実習担当教員は、病棟実習前日に患児の年齢や疾患などの情報を学生に提供し、学生のペアについては、希望する担当患児を選択することでペアの学生が決定した。実習方法は、学生が個々で担当した患児の看護過程を展開した。また、学生一人ひとりが思考力を身につけられるよう、行動計画の立案や臨地実習指導者へ発表し、実習記録の記載は、学生個々で行い、実習担当教員は個別指導と両者への指導を併用して行った。

筆者らは、Ａ看護系大学におけるペア実習の評価として、ペア実習の利点と欠点の認識について学生への調査を実施した（古屋 他，2019）。その結果、学生が感じているペア実習の利点は、学生同士が刺激し、補い合うことで学習意欲や看護が深まり、子どもへ良い影響があったことが明らかとなった。他の先行研究では、ペアで看護することによって心身が楽になる、コミュニケーションが増す、能力開発に繋がるなどの効果を示すと報告されている（三輪 他，2015）。これと同様に実習に対して緊張の強い学生にとっても、患児を学生２名で受け持つことで観察する際に気づくことが増え、看護を深めることができていた。一方で、ペア実習の欠点として、学生はペアの学生に意見を言いづらく、劣等感を持つようになったり、ペア間の人間関係やコミュニケーションに対してストレスを感じていたりしているという結果もあった。藤尾ら（2018）の報告では、20代前半の学生は、日常生活におけるコミュニケーション能力が低下していることを指摘し、これと同様に、自分の意見を相手に伝えることの難しさを感じていることが考えられた。また、前述した状況から近年、小児看護ではペア実習を実施する教育機関（林 他，2018；佐藤 他，2018）が増加し、ペア実習の方法についての関心が高まっている。そこで、臨地実習指導者と実習担当教員が統一した質の高い実習指導を実施するために両者が活用できる小児看護学実習におけるペア実習指導マニュアル（以下、指導マニュアル）の作成が急務であると考え先行研究で取り組んだ。その際、指導マニュアルの作成に当たっては、先行研究（古屋 他，2019）で明らかになったペア実習について学生が認識している利点と欠点、およびペア実習を実施している小児看護学教員の意見も参考に作成し本研究では、指導マニュアルを活用したペア実習指導の実際について明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．用語の定義

本研究における「指導者」とは、臨地実習指導者と実習担当教員の両者のことを示すこととした。

Ⅲ．ペア実習指導マニュアル

指導マニュアルは、指導者が共有できる指導方法を提示し、実習前・実習中・実習後における「臨時実習指導者と実習担当教員の行動・留意すること」および「学生への説明内容」の項目で構成した。指導マニュアルの一部を**表１**で示す。

表１　小児看護学実習におけるペア実習指導マニュアル（一部）

	臨床実習指導者と実習担当教員の行動・留意点	学生への説明内容	備考　具体例など
１・実習前	１）実習開始直前オリエンテーション時に、○○病院・○○病院で実習する学生はペア実習になることを伝える。 ２）ペア実習に関する概要を学生に伝える。説明内容は右記のとおりである。 ＊ペア実習の経験の有無、方法、感想を学生に尋ね、反応をみる。	２）ペア実習に関する概要 【ペア実習の方法】２人の学生が１人の子どもを担当する。 【患者選択時の注意点】これまでの実習経験を振り返り、課題（技術経験、ケア経験、コミュニケーションの不足など）を考えて決定する。 ペア決定後に受け持ち患者を決定することはしない。 【学習方法】疾患や治療、看護技術などの学習は協力してよいが、一人ひとりが内容を確実に理解できるようにする。 【行動の実際】ベッドサイドに行くときには、ペアで行っても１人で行っても構わない。子どものベッドサイドで過ごす時間を優先して取り、電子カルテからの情報収集は必ずしもペアで行わなくてよい。 【情報共有の時間確保】実習時間中にペアで情報共有する時間を確保する。通学途中やラインなどのSNSを用いた情報交換はしない。 【行動計画立案】子どもの生活リズムや治療・検査のスケジュールに合わせて個人で立案する。看護ケアに関しては、主担当、補助などの役割を相談しておくとよい。	＊初めはペアで行き、一緒に話をするほうがお互いに心強いと思う。

	臨床実習指導者と実習担当教員の行動・留意点	学生への説明内容	備考　具体例など
1・実習前	3）学生がペア実習へのモチベーションを高められるよう学生にペア実習の利点・欠点を伝える。 ＊利点、欠点を伝えた際の学生の反応をみる。学生の反応に合わせて、より具体的に利点・欠点の例示を行う。 ＊学生からの質問に答える。 4)必要時、他の分野実習担当教員にペア実習状況の確認をする。	【日々の行動計画の調整】ペアで同席し、順番に発表する。先に発表した学生へのコメントが多くなる傾向があるので、毎日順番を逆にする。 【看護ケアの時間調整】行動計画調整時に、学生間及び指導者・教員とで相談して決定する。 【看護ケア時の安全への配慮】ペアでベッドサイドにいると、「相手がみていてくれるのでは？」と思い込み、安全への配慮ができにくくなる場合があるため、声をかけ合うなどして注意する。 【看護過程の展開】実習記録１号紙～４号紙、関連図の記載は、学生個々で行う。 【教員への相談】ペア実習への不安があったら教員に相談する。 3）ペア実習をよい学びに繋げるために 【ペア実習の利点・欠点】先輩たちへの調査結果から、ペア実習の利点・欠点について説明し、利点を生かし、欠点に配慮した実習となるよう伝える。 【ペア実習の利点より】 指導者や教員との関係が築きやすい、話しやすい、緊張感が和らぐ、相談しながらやれて心強い、学習方法・実習への姿勢・子どもとの接し方が学べる、患者の安心感につながったり、一人で受け持つよりもさらに看護が深まったりする、看護技術の確認ができる、ペア・グループ間で仲良くなれる →＊子どもへのかかわり方に不安を持つ学生は多い。どのようにコミュニケーションをとればよいか、相手のかかわり方を観察して学んだり、話し合ったりするとよい。 ＊子どもにどのような看護が必要か、看護学生としてよりよい看護ケアをするためにはどうしたらよいか、などペアで相談しながらケアを行うことができるメリットを生かし、子どもと家族のケアを実践する。 【ペア実習の欠点より】 ペア実習への不安がある、ペア学生回数が減る、ペアの学生に甘えたり任せたりしてしまう、意見が言いづらく、意見を合わせるのが大変である、指導者との調整の際、配慮が必要、教員の評価が気になる →＊臨地実習の機会は限られた子どもと家族に関わりながら看護を学ぶことができる貴重な機会である。ペアの学生に甘えたり任せたりせず、最大限の努力をし、担当させてもらう子どもと家族のために、建設的に意見交換する努力をする。 ＊ペアでの意見交換がうまくいかないとき、指導者との調整に困るときには、教員に自らヘルプを求めよう。 ＊日々の子どもへのケアに関しては、主担当を決めておき、主担当をする学生が行動計画、留意点の発表を行う。補助をする学生は、補助をする際の留意点を述べる。 ＊ペアでケアをする際の協力体制として、主担当のケアを補助する、協力する、同時に別の作業を進めるなどが考えられるが、担当患者の状況に合わせてどの方法が最適かをペア学生間で検討する。 ＊1週目の終わりと実習終了時にペア実習に関する意見を尋ねる。	
2・実習中	1）全体的な留意点 下記内容について留意し、必要時、臨床実習指導者とも情報を共有する。 【ペアの関係性への配慮】実習中は常にペア間の関係性に注意を払い、学生同士がどのように行動しているか、相手の言動に対してどのように反応しているか、教員が伝えたことが共有されているか、共同・協同学習ができているかなどをみる。	以下、オリエンテーション時の説明と同様であるが、情報提供のタイミングと担当患者の状況を考慮して（子どもの発達や家族の状況、治療の影響などの情報もとりいれながらより具体的に）再度説明する。 2）朝の行動調整 【行動計画立案】子どもの生活リズムや治療・検査のスケジュールに合わせて個人で立案する。看護ケアに関しては、主担当、補助などの役割を相談しておくとよい。 【日々の行動計画の調整】ペアで同席し、順番に発表する。先に発表した学生へのコメントが多くなる傾向があるので、毎日順番を逆にする。看護ケアに関しては、ペア間で相談して決めた役割を元に、行動計画、留意点の発表を行う。 【看護ケアの時間調整】行動計画調整時に、学生間及び指導者・教員とで相談して決定する。 【ペア間の協力体制づくり】ペアでケアをする際の協力体制として、主担当のケアを補助する、協力する、同時に別の作業を進めるなどが考えられる。担当患者の状況に合わせ、最適な方法をペア学生間で検討する。	＊子どもへのかかわりが上手な学生と上手でない学生がペアになっている場合、子どもと片方の学生の関係構築がうまくいかないことがある。 ＊○○さんばっかりと思われないよう、気にかけていることが伝わるように配慮する。

	臨床実習指導者と実習担当教員の行動・留意点	学生への説明内容	備考　具体例など
	【ペアの関係性への働きかけ】基本的には学生間で関係が構築・調整できることを目指すが、実習目標の達成に影響する場合などは早期に介入を行う。関係性がすぐれない場合、ペア学生と比較して自信をなくしている場合などは、個別に話を聴く機会をつくる。	３）看護過程の展開、退院指導や遊びの計画など 【看護過程の展開】学生個々で行う。２週目月・火曜日に実施する３・４号紙の発表に関しては、同じ看護問題で発表するか、違う問題を発表するかを教員と相談して決定する。 ＊退院指導、遊びの計画などは共同で実施しても構わないが、別々の実施も可能であることを伝える。子どもと家族の状況に合わせて最善のケアができるように考える。 ４）子どもと家族へのベッドサイドケア 【行動の実際】ベッドサイドに行くときには、ペアで行っても１人でいってもかまわない。子どものベッドサイドで過ごす時間を優先してとり、電子カルテからの情報収集は必ずしもペアでおこなわなくてよい。	

指導マニュアル作成の目的は、指導者がペア実習において学生の学びに与える利点、欠点を理解したうえで必要な配慮をした指導ができる、学生自身がペア実習の利点、欠点を理解して実習に臨むことにより、実習目標の達成と自分なりの課題の克服をしやすくなることであった。そのことにより、担当患児に対してよりよい看護ケアが提供できることを期待し作成した。

指導マニュアルの内容は、実習開始直前オリエンテーション時に、ペア実習になることを伝え、ペア実習の方法、学習方法、ベッドサイドでの行動の実際などのペア実習に関する概要を説明した。また、ペア実習をよい学びに繋げるためにペア実習の利点・欠点と考えられることを伝え、学生がペア実習へのモチベーションを高められるよう、学生の反応に合わせて、より具体的に補足するようにした。また、実習中は指導者間で情報共有する内容を示した。

Ⅳ．研究方法

１．研究デザイン

質的記述的研究

２．研究対象者

研究対象者は５名であり、その内訳は臨地実習指導者２名、実習担当教員３名であった。

３．データ収集期間

2019年12月～2020年３月

４．データ収集方法

研究対象者と一緒に実習指導を行っていない研究者がインタビューガイドに沿ってインタビューを実施した。録音したインタビューの内容から逐語録を作成しデータとした。インタビューの内容は、指導マニュアルを活用したペア実習指導の実際であった。インタビューの時間は17～28分、平均24分であった。

５．データ分析方法

データ分析は、質的帰納的に分析を行った。逐語録を精読し、指導マニュアルを活用したペア実習指導の実際に関して対象者の語りの意図が損なわれないように、分類し対象者の語り（コード）を意味内容の類似したもので集め、共通する意味内容を文章で表現し、サブカテゴリーとして統合し、カテゴリーを生成した。分析の質の担保については、研究者間で熟考を重ね分析を検討し厳密性の確保に努めた。

Ⅴ．倫理的配慮

本研究は、順天堂大学医療看護学部研究等倫理委員会の承認を得て実施した（順看倫第2019-43）。対象者には、研究目的・内容、研究への協力の有無は自由意思で決められること、匿名性、データの管理と研究結果の公表について文書を用いて説明した。対象者に対して強制的な依頼にならないよう配慮する研究の手続きとして、研究への同意およびインタビューは、対象者と利害関係のない研究者が行った。また、インタビュー内容については個人が特定できないように配慮した。

Ⅵ．結果

１．対象者の概要

対象者の小児病棟での経験年数は７年～13年で平均は8.8年、実習指導経験年数は１年～10年で平均は4.4年であった。

２．指導マニュアルを活用したペア実習指導の実際

本研究における文中では、カテゴリーを【　】、サ

表２　指導マニュアルを活用したペア実習指導の実際

カテゴリー	サブカテゴリー	指導者の語り（コード）の一部
ペア実習指導に関して共通理解し指導ができた	ペア実習の注意事項や学生の準備状況が分かった	マニュアルによって学生はどんなふうに準備してきたか見えた。
		ペア実習についての注意事項が分かった。
	ペア実習の具体的なかかわり方が分かった	ペアの学生同士が振り返りの時間を取ることが必要ということ。
		どういう指導をしたらいいのかっていうのを（臨地実習）指導者さんとマニュアルを活用して事前に話しあった。
		ベッドサイドに行くときは別に２人で行かなくてもいいとか、ペア実習のやり方が分かった。
		ペア実習の利点とか注意点を知ったことで指導する上で改めて整理できた。
		こういうの（指導マニュアル）をちゃんと見て、（指導マニュアル）ある方が安心して指導できる。
		ペア間での学生への声のかけ方がわかった。
	ペア実習指導について病棟メンバーに知ってもらえた	何故ペア実習をしているかというところから、ペアの利点について（病棟の看護師）メンバーに知ってもらえた。
		（病棟の看護師）メンバーにどうしてペア実習をしていると聞かれたときに答えることができた。
統一したペア実習の指導ができた	明文化されたことで学生に対して、ペア実習について説明しやすくなった	ペア実習の欠点を言うときに言いにくさがありました。なんて言っていいかなって、そういう時に役立った。
		マニュアルをみて、欠点を言う際に学生がネガティブにならないように実習に影響を与えないように言うことができた。
		ペア実習の欠点を学生に言うのがすごく苦手だった。
		明文化されたことで学生への説明もしやすくなった。
		学生に利点や欠点を説明することができたことで、自身も気を付けないといけない思った。
		明文化されていた方がやっぱり行動の指針になった。
	新しい指導者へペア実習について説明できた	新しい（臨地実習）指導者さんへの説明がしやすい。
		指導者間の共通認識に指導マニュアルをすごく活用しました。
	ペア実習について統一した説明ができた	マニュアルを使用してオリエンテーションすることで学生がペア実習をイメージしやすいように伝えることができた。
		マニュアルがある、統一した（指導の）説明があるので、教員が違っても統一したペア実習の説明ができるっていうことは、すごくありがたかったかなと思いました。
ペア実習指導の振り返りができた	面接の際に活用できた	1週目の最後の面接は必ず個別で面接の際にペア実習はどうか確認した。
		1週目と最終日の面接の際にマニュアルも振り返って、学生と面接を行うようにした。
	学生への配慮が出来ているか振り返りの際に確認できた	カンファレンスや朝の行動調整の時にどういう配慮が必要だったか確認した。
		今まで自分がやっていたペア実習指導が、確認できた。自身の（学生への）かかわりが、これで良かったと確認できた。
		自分がちゃんと学生に配慮とかできているか振り返りながら指導できた。
ペア間の関係性に悩んだ	ペア実習はやりにくいと言われた際のかかわり方に悩んだ	最終の面談で初めて、ペア実習について学生からやりにくかったところを聞いた。
		ペア実習はやっぱりやりにくいと学生に言われたことが何回かあった。
		ペア間でお互いが早くケアや記録を終わらせ、看護問題を抽出するために協力するだけのペア間の関係では、このペア実習のいいところが活かせない。
	ペア間でどこまで一緒に考えさせるか悩んだ	どこまでペア間で考えさせるか。ペアをセットで考えていいのか・・。
		ペア間で全部一緒じゃないといけないと思っていた。学生の今日の実習目標だったりとか。
		思考のところので、ペアを一緒にさせてしまわないようにすることが、ちょっと大変だった。
		ペア間でのすり合わせ、別にすり合わせする必要性がないんだったら、ペア間で看護の方向性が間違ってるんだったら早いときに軌道修正はした方がいいと思った。
		学生とは違う私の考えがあるから、別に強要するわけではないですけど。
		ペアでそこに向かっていく過程が若干違うかもしれないのに、一緒にさせちゃってるときとかもあるのかなと、悩んだ。
	ペア関係が上手くいっていないときの対処方法に悩んだ	ペアの関係性が悪くなった事例などから、対処方法をがあると分かりやすい。対処する視点やペアを継続するか、変更するか、決める視点など。
		ペア間で上手くいかないときに我慢させて学生間でやっていくのが患者さんにとって本当にいいのかって思う。
		ペアの関係が上手くいっていないときの学生のフォローは個々の教員に任されている。上手くいかなかったときの対処方法があると良い思った。

ブカテゴリーを〈　〉、対象者の語りを「　」で記述した。

指導マニュアルを活用したペア実習指導の実際に関しては、53のコード、11のサブカテゴリーが抽出され、指導マニュアルを活用することにより【ペア実習指導に関して共通理解し指導ができた】【統一したペア実習の指導ができた】【ペア実習指導の振り返りができた】【ペア間の関係性に悩んだ】の４つにカテゴリー生成された（**表２**）。

【ペア実習指導に関して共通理解し指導ができた】

このカテゴリーには、〈ペア実習の注意事項や学生の準備状況が分かった〉〈ペア実習の具体的なかかわり方が分かった〉〈ペア実習指導について病棟メンバーに知ってもらえた〉の３つのサブカテゴリーが含まれていた。「マニュアルによって学生はどんなふうに準備してきたか見えた」や「ペア実習の利点とか注意点を知ったことで指導する上で改めて整理できた」の語りから学生の実習前の準備状況やペア実習に関する指導について指導マニュアルを通して確認できていた。また、「ペアの学生同士が振り返りの時間を取ることが必要」や「ベッドサイドに行くときは別に２人で行かなくてもいいとか、ペア実習のやり方が分かった」から具体的な指導方法や学生へのかかわり方が分かり、指導者と病棟メンバーがペア実習への共通理解を深めて指導ができていた。

【統一したペア実習の指導ができた】

このカテゴリーには、〈明文化されたことで学生に対して、ペア実習について説明しやすくなった〉〈新しい指導者へペア実習について説明できた〉〈ペア実習について統一した説明ができた〉の３つのサブカテゴリーが含まれていた。「ペア実習の欠点を言うときに言いにくさがありました。なんて言っていいかなって、そういう時に役立った」や「明文化されたことで学生への説明もしやすくなった」と、指導マニュアルにより指導内容を明文化したことにより、ペア実習について説明しやすくなったと語っていた。また、「指導者間の共通認識に指導マニュアルをすごく活用しました」や「指導マニュアルを使用してオリエンテーションすることで学生がペア実習をイメージしやすいように伝えることができた」と語り、指導者が指導マニュアルを活用しながら学生にかかわることやペア実習の説明において統一した指導ができたと話した。

【ペア実習指導の振り返りができた】

このカテゴリーには、〈面接の際に活用できた〉〈学生への配慮が出来ているか振り返りの際に確認できた〉の２つのサブカテゴリーが含まれていた。「１週目の最後の面接は必ず個別で面接の際にペア実習はどうか確認した」や「１週目と最終日の面接の際にマニュアルも振り返って、学生と面接を行うようにした」と、面接の際に指導マニュアルを確認していた。また、「自身の（学生への）かかわりが、これで良かったと確認できた」や「自分がちゃんと学生に配慮とかできているか振り返りながら指導できた」と語り、学生へのかかわりがペアの学生に配慮した指導になっているか確認するための振り返りができた。

【ペア間の関係性に悩んだ】

このカテゴリーには、〈ペア実習はやりにくいと言われた際のかかわり方に悩んだ〉〈ペア間でどこまで一緒に考えさせるか悩んだ〉〈ペア関係が上手くいっていないときの対処方法に悩んだ〉の３つのサブカテゴリーが含まれていた。「ペア実習がやっぱりやりにくいと学生に言われたことが何回かあった」や「ペア実習のいいところが活かせない」と語り、ペア実習の利点を伝えきれていないこと、やりにくさを感じている学生の指導に悩んでいた。また、「ペア間で全部一緒じゃないといけないと思っていた。学生の今日の実習目標だったり」や「ペアでそこに向かっていく過程が若干違うかもしれないのに、一緒にさせちゃっているときとかもあるのかな、とか悩んだ」から、看護過程を展開する際ペアの学生間で相違があった場合に、ペアで一緒にどこまで考えさせれば良いか悩んでいた。さらに、「ペア間で上手くいかないときに我慢させて学生間でやっていくのが患者さんにとって本当にいいのかって思う」や「ペアの関係が上手くいっていないときの学生のフォローは個々の実習担当教員に任されている」とペア間の関係性が上手くいかない学生に対する指導に苦慮したことを語り、上手くいかなかったときの対処方法に悩んでいた。

Ⅶ. 考察

指導マニュアルを活用したペア実習指導の実際に関しては、４つにカテゴリー生成された。【ペア実習指導に関して共通理解し指導ができた】【統一したペア実習の指導ができた】【ペア実習指導の振り返りができた】は、肯定的なペア実習指導に関する意見であった。その一方で【ペア間の関係性に悩んだ】では、指導マニュアルを活用したペア実習指導においてペア学生のかかわりについて悩んでいたことが明らかになっ

た。本章では、研究で得られた結果から、１．ペア実習における指導マニュアルを活用した指導の意義、２．ペア実習指導において指導マニュアルを活用することの効果および今後の活用への課題について考察する。

１．ペア実習における指導マニュアルを活用した指導の意義

これまでペア実習指導においては具体的に学生へのペア実習に関する概要や指導の際にペア学生へ留意することなど、明文化されていなかった。先行研究（古屋 他，2019）において、ペア実習について学生がどのように認識しているかを調査した結果からペア実習の利点と欠点が明らかになった。そのため、教育側と学修者双方がその点を理解して指導の際に考慮する必要があると示唆され、指導マニュアルを作成した。本研究の結果、ペア実習において指導マニュアルを活用することで【ペア実習指導に関して共通理解し指導ができた】については、学生の実習前からの準備状況や実習中の具体的な指導者のかかわりについて示すことにより、指導者間が相互協力し、学生のレディネスに応じて学生の持つ能力を引き出し（松岡 他，2013）実習目標を達成できるように指導することができ、学生の実習に対する達成感にも影響したと考える。また、指導者にもペア実習のイメージがつきにくい場合があることについて、実習において学生の看護実践能力の修得に重要な役割を担っているにもかかわらず、その役割を十分に果たせないまま日々指導に携わっているという報告がある（中山，2015，久津見ら，2012）。臨床の看護師にとって指導内容を体系化および具現化した指導マニュアルがあることは、指導者としてのかかわりが分かり、指導者自身の指導に対する達成感にも繋がるのではないかと推察される。本結果においてもペア実習の学生２人がどのようにベッドサイドで子どもとかかわるか〈具体的なかかわり方がわかった〉ことで、ペア実習特有の学生へのかかわりについて指導マニュアルにより確認できた。その点において指導者間の相互連携・協力体制の強化や指導者の変更・交代などの時にも、継続した実習指導ができるため必要であると考える。また、指導マニュアルによりペア実習について共通理解し指導できたが、学生のおかれている状況をさらに深く理解するためには、指導者等に臨床に出る前の学生の状況を理解していただく機会として実習前の演習への参加（竹村 他，2018）により、より臨床との連携に繋がると考える。

指導マニュアルを活用した指導をすることにより、〈ペア実習指導について病棟メンバーに知ってもらえた〉ということから指導者間だけではなく実習施設の病棟メンバーとも共通理解ができていた。実習を受け入れる病棟側の体制としてこの指導マニュアルを役立てることは、学生にとっても安心した環境で実習ができると考える。森本ら（2021）の看護実践場面における教員の教授活動を表す概念として、実習展開の円滑化に向けた環境の調整を挙げている。病棟実習では病棟メンバーと学生が円滑な相互行為を展開するためにペア実習の進め方や利点や欠点を理解するための一つの方法として指導マニュアルが活用されることを期待したい。

２．ペア実習指導において指導マニュアルを活用することの効果および今後の活用への課題

指導マニュアルによりペア実習指導について明文化されたことで【統一したペア実習の指導ができた】とペア実習指導の実際について評価している。〈学生に対してペア実習について説明しやすくなった〉や〈新しい指導者へペア実習について説明できた〉から、ペア実習についてどのように説明して良いか明確になっていなかったため、指導マニュアルで明確になり活用できていた。前述したように、指導者間では相互協力が必須となるため学生に対する指導において統一した指導マニュアルを有効に活用することの必要性が示唆された。

【指導の振り返りができた】については、指導者自身〈学生への配慮が出来ているか〉教育的にかかわることができているか、確認するために活用できていた。ペア実習においては学生がペア学生に劣等感を持つことがあると報告（古屋 他，2019）したように、学生は指導者の態度や言動に影響される。そのため、その点を指導マニュアルで示すことは必要であった。また、指導者の振り返りに活用できたことは、ペアの学生に対して教育的にかかわることができたことに繋がったと示唆を得た。

その一方で、【ペア間の関係性に悩んだ】では、〈ペア実習はやりにくいと言われた際のかかわりに悩んだ〉と、ペア間の関係性がコミュニケーション不足や自分の意見が言いづらかった（古屋 他，2019）など様々な理由からペア実習が成立しない事例がある。その場合の対処は、各指導者の力量にかかっていることもあり、指導マニュアルでは明らかにしていなかった。

〈ペア間でどこまで一緒に考えさせるか〉や〈ペア関係が上手くいっていないときの対処方法があると良かった〉ことから、実習を円滑に進めるために具体的なペア学生の関係性の困難事例や解決への示唆を提示することはペア実習においては必須であると考える。

指導マニュアルを作成した目的には、指導者が学生の学びに与える利点や欠点を理解したうえで必要な配慮をした指導ができることがあった。ペア実習では、学生と指導者が利点や欠点を理解し実習の到達目標が達成できるよう指導マニュアルを有効に活用することが必要である。また、今後は指導する学生の特性やレディネスの変化を教員は早期に捉え、指導マニュアルを学生に合わせて効果的に活用していくと共に、指導マニュアルを適宜見直すことが必要である。その際は病棟からの十分な意見を取り入れ、病棟全体で学生の実習の指導に携わるための一つの指標となるよう指導マニュアルの洗練化が必須である。いつでも活用・確認した指導ができるように、ポケット式のマニュアルや指導者間の連携をフローチャートにする（松本 他, 2013）など工夫が必要である。

Ⅷ. 結論

1．小児看護学実習における指導マニュアルを活用したペア実習指導の実際については、【ペア実習指導に関して共通理解し指導ができた】【統一したペア実習の指導ができた】【ペア実習指導の振り返りができた】【ペア間の関係性に悩んだ】の４つにカテゴリー生成された。
2．指導者は、ペア実習指導の実際について指導マニュアルにより明文化されたことで、指導者間で指導について共通理解および統一した指導ができたと語っていた。一方で、指導の際、ペア学生間の関係性について悩んでいた。
3．ペア実習指導は指導者間の相互協力が必須であり、統一した指導を行うためにも指導マニュアルを有効に活用することが必要であると示唆された。

Ⅸ. 研究の限界と今後の課題

本研究においては、小児看護学実習における指導マニュアルを活用したペア実習指導の実際について、指導者は一施設であり対象者が少なかったため一般化は難しい。また、Ａ看護系大学では臨地実習指導者の協力のもと実習指導が行われている。よってその情報共有が課題であったが、今回の指導マニュアルを通して、一貫したよりよい指導が実施できると期待できる。ただし、臨地実習指導者の協力が得られない教育機関においては、違う課題があると考えられる。よって本研究は、Ａ看護系大学特有の指導マニュアルを活用した指導であることは否めない。ただし、今後増加するであろう実習形態の変化に対応する一助になると考える。指導者は、ペア実習指導の際の効果的な指導方法を検討することが今後の課題である。

謝辞

本研究の趣旨にご理解いただき、インタビューにご協力頂きました指導者の皆様に心より感謝を申し上げます。本研究は2019年度順天堂大学医療看護学部共同研究費の助成を受けて行ったものである。本研究における利益相反は存在しない。

引用文献

藤尾麻衣子, 藤谷章恵, 大式久美子, 他(2018). 臨地実習において学生同士が互いに及ぼす影響に関する文献研究. 武蔵野大学看護学研究所紀要, 12, 31-39.
古屋千晶, 西田みゆき, 川口千鶴(2019). 小児看護学実習におけるペア実習について学生が認識した利点と欠点. 医療看護研究, 15(2), 32-40.
林亮, 齊藤麻子, 石井くみ子, 他(2018). 小児看護実習におけるペア実習に対する学習の評価. 順天堂保健看護研究, 6, 34-41.
九津見雅美, 冨澤理恵, 新井祐恵, 他(2012). Ａ病院でのＢ大学看護学臨地実習における実習指導役割実施状況に関する調査－実習指導者・看護学教員の自己評価と看護学生の満足度から－. 千里金襴大学紀要, 9, 119-127.
松岡鈴子, 嶋岡暢希, 川上美樹子 他(2013). 看護基礎教育における助産学生の実践能力を高める教育方法－臨床指導者用実習指導マニュアルの提案－. 高知女子大学看護学雑誌, 38, 2, 118-128.
三輪峰子, 川尻麻佑子, 安井裕美子, 他(2015). パートナーシップ・ナーシング・システム導入による成果と成果に影響する要因. 第45回日本看護学会論文集　看護管理, 19-22.
中山登志子, 舟島なをみ(2015).「教育ニードアセスメントツール－実習指導者用－」の開発－実習指導者の役割遂行を支援する看護継続教育の実現に向けて－. 日本看護研究学会雑誌, 38, 1, 73-83.
日本看護系大学協議会(2018). 2017年度 看護系大学に

関する実態調査. https://www. janpu. or. jp/wp/wp-content/uploads/2019/06/H30DB. pdf(May, 2, 2021)

西田みゆき, 北島靖子(2003). 小児看護実習における学生の困難感. 順天堂医療短期大学紀要, 14, 44-52.

佐藤朝美, 小村三千代, 堀田昇吾(2018). ピア・ラーニングを活用した“ペア受け持ち制”小児看護学実習における学生の体験. 日本小児看護学会誌, 27, 73-82.

杉森みど里, 舟島なをみ(2021). 看護教育学第7版. pp. 275-286. 医学書院.

竹村眞理, 山﨑さやか, 小俣萌, 他(2018). 看護系大学臨地実習における臨地実習指導者と教員の連携について. 健康科学大学紀要, 14, 173-187.

Research Report

Abstract

Actual Conditions of Paired Training Guidance Using an Instruction Manual in the Practice of Child Health Nursing

The purpose of this study was to clarify the actual conditions of paired training guidance using an instruction manual in child health nursing practical training. We conducted an interview survey of instructors and analyzed the data qualitatively and inductively. The actual conditions of paired training guidance using the instruction manual were classified into four categories: "common understanding and guidance on paired training guidance," "guidance on unified paired training," "recollection of paired training guidance," and "concern about the relationship between the pair."

To date, we have yet to clarify specific details regarding the paired training guidance, including the outline of the student pair practice and attention during guidance. Within this context, as a result of providing practical training using the paired training guidance management, the instructor commented that the contents of the guidance was clear and that common understanding and unified guidance were possible. Meanwhile, the instructors expressed concern about the relationship between paired students.

The results suggested that in order to provide unified guidance, mutual cooperation between instructors was indispensable for paired training guidance. The results further suggested the importance of the effective utilization of the instruction manual.

Key words：child health nursing, pair practice, guidance manual, clinical instructor

FURUYA Chiaki, NISHIDA Miyuki, SAITO Asako, HAYASHI Ryo, KOMIYAMA Hiromi